

第5節 棒受網漁業

1. 沿革

1) 構受網漁業（イワシ、アジ、サバ）の歴史

いわし棒受網は伊豆・網代方面で、あじ・さば棒受網は千葉県内湾で相当古くから行われていた。いわし棒受網は規模も小さくあまり重要な漁業でなかったが、昭和30年代（1955～1964年）になって沿岸漁業が不振となり、少人数で操業できて経費もあまりかからない、また少々の時化でも内湾でできるということから山陰方面へ導入され、小羽・中羽イワシを漁獲する目的で、棒受網を少し変形した浮敷網という網で操業されるようになった。

あじ・さば棒受網は、伊豆七島方面に漁場が発見されてから規模も大きくなり、1960（昭35）年ごろには30～40ト級の船で操業されるようになった。あじ・さば棒受網漁船は静岡、神奈川、東京、千葉方面に多く、関西方面では紀州串本方面で行われている。

2) 本県における棒受網漁業の歴史

(1) 導入の経緯

1952（昭27）年ごろ、阿久根市を根拠地とするまき網漁業会社の「阿久根水産」が千葉県千倉からさば一本釣中古船「らくしょう丸」20トを購入し、併せて棒受網の導入を行い一漁期操業した。しかし、イワシの回遊が少なく、その後操業は中止した。

1959（昭34）年に「阿久根水産」の船頭経験者の吉村龍助氏が中心となって、千葉県千倉からさんま棒受網を導入した結果、阿久根市漁協、黒之浜漁協所属の漁船4～5隻により操業されるに至った。

さらに、1965～1975（昭40～50）年にかけて漸次操業統数が増加した。その結果、1975（昭50）年12月には、北薩地域（出水市、東町、長島町、阿久根市、黒之浜の5漁協）の善業統数は48統となった。

(2) 漁業制度との関連

棒受網漁業は敷網漁業の一種に分類され、知事許可漁業である。許可に当たっては次の制限、条件が付されている（平成8年現在）。

ア．10ト未満の漁船に対して許可される。

イ．日の出から日没までの間は操業が禁止。

ウ．操業にあたっては火船1隻以内で、使用する集魚灯の光力は10kw以内。

エ．操業海域についても制限がされる。

その他：漁期は周年であるが、盛漁期は5～7月、9～10月となっている。

漁獲象魚は、イワシ類、キビナゴ、ソウダガツオである。

漁場は、西薩から北薩海域、大隅海域で、水深は60m以浅の海域となっている。

(3) 漁具・漁法

漁 具

本県のいわし棒受網の漁具の構造については、図1-1-(1)と図1-1-(2)のとおりであるが、漁具の変遷の経緯を知るためにも、1960（昭35）年ごろの島根県のおいわし棒受網について、見取図と配置を図1-2に示した。

表1-1 漁具仕様（黒之浜地区）

材 料	規 格	数 量
テトロン210	4本×26節 400掛	9反
〃 250	4 ×26 400	3.5
〃 〃	4 ×27 400	1.25
〃 〃	6 ×27 200	2.5
〃 210	4 ×30 400	2
〃 250	18 ×10 200	1
アミラン210	6 ×27 100	1
テトロンラッセル	10 ×26 500	0.8
アミラン210	21 ×12 7	1
〃	30 ×12 10	1
〃	36 ×10 5	1
ポリロープ	1.2m/m	200m
浮 子	合成12白	320個
鉛沈子	30匁	320個
カ ン	丸管 4分	16個

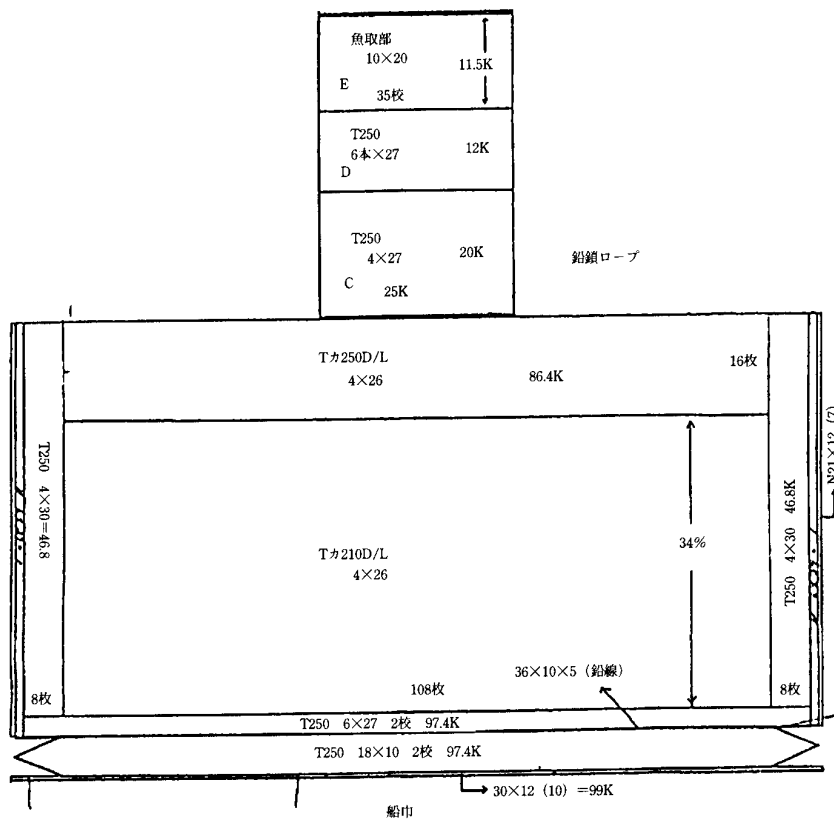
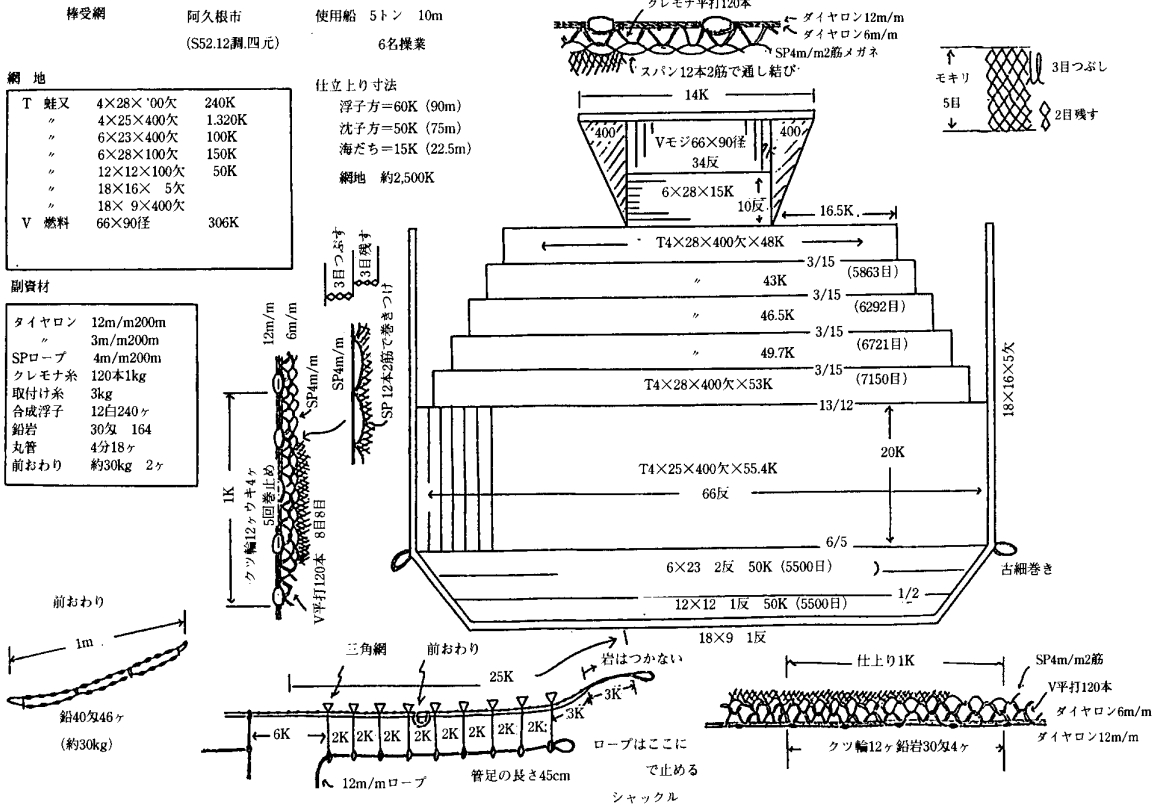


図1-1-(1) 棒受網地配図（阿久根市，平成10年度，9ト型用）



操業法

図 1 - 1 - (2) 棒受網

操業方法を図 1 - 3 に示す。

水中灯を、片舷から竹で約 7.5m 先の水中約 75cm ぐらゐの に点灯して集魚する。集魚したら張り網を利用し、船尾を潮上に対し横にして点灯を続ける。

反対側の舷から投網する。この場合、船尾から約 6~7.5m ぐらゐの棒を出し、網口を広くする。網の準備ができたなら、集魚灯を徐々に近づけ、 まで移動させる。

次に、 から に集魚灯を切りかえる。この場合、船底を通して に移動させる方法もある。 にある集魚灯を滑車によって まで魚群を誘導した時、環網を速やかにローラーでたぐりあげて締め、網中の魚を漁獲する。

あじ・さば棒受網については、静岡県伊東で行われていた網の配置図を参考に図 1 - 4 に示す。

(4) 棒受網漁業技術の改良普及の経緯

当該漁業の本県における先進地域である北薩地域においては、1965~1975 (昭 40~50) 年に、県北薩水産業改良普及員 (阿久根市所在) の指導で、阿久根市漁協、黒之浜漁協棒受網業者会、阿久根市漁協会員、北薩普及協議会幹事会等が数回にわたって山口県長門市湊漁協等へ視察研修を行い、漁船の漁労装備、操船技術、漁網の仕立て等について修得し、その技術改良を図った。その結果、漁網の網地は従来のクレモナから、軽くて水切りの良いナイロン製に改良された。

漁船も従来の 3~5 トン型から 9.9 トン型へ進み、漁網も大きくなって漁獲の増大が実現した。その他、1975 (昭 50) 年には、阿久根地区漁船にネットホーラーが設置され、揚網の迅速化、省力化が図られた。

さらに、漁具の一つである張出棒は、そままでの孟宗竹製では重いとの指摘があり、アルミニウム

製に改良された。ところがアルミニウム棒は軽いという利点の反面折損事故が多く、補修も困難なため、県の漁業専技や普及所の指導、メーカーの協力でFRP製に改良された。この棒が県内全域に普及、操業の効率化に寄与している。

(5) 漁業構造の推移

経営体

漁業経営体数と漁業許可件数は同一とみて、『県水産要覧』の漁業許可件数を年次別に表1-1に示す。

・経営体数は、1955(昭30)年の3体が1959(昭34)年に19体、1962(昭37)年に99体と急増したあと漸減傾向に転じ、1973(昭48)年には37体に減少した。その後は増加傾向をたどり、1981(昭56)年には154体と最高に至った。翌1982年から再び減少傾向で、1985年に100体を下回り、平成(1989年～)になっても80体台から60体台と減少して現在に至っている。

・地区別分布状況は、北薩、西薩、南薩地区が90%を占め、なかでも北薩地区が約80%を占めている。これは漁場形成や背後に加工場(煮干、塩干など)を控えているためと考えられる。

・棒受網の主な対象魚は、イワシ類、ソウダガツオ、キビナゴ等である。県内の生産量は、1955(昭30)年421ト、1960(昭35)年1,688トとなり、1964(昭40)年までほぼ1,000ト台で推移した。しかし、1966(昭41)年4,165ト、1968(昭43)年5,871ト、1977(昭52)年6,609ト、1978(昭53)年8,784トと急増した。

その後、1980(昭55)年まで6,000ト台で推移したが、1981(昭56)年以降4,000ト台となり、1983~1984(昭58~59)年は2,000ト台に減少した。また1985~1989(昭60~平元)年までは4,000~5,000ト台を推移したが、1990(平2)年と1993(平5)年には9,000ト台を記録、1978(昭53)年の8,000ト台を上回る実績を残した。

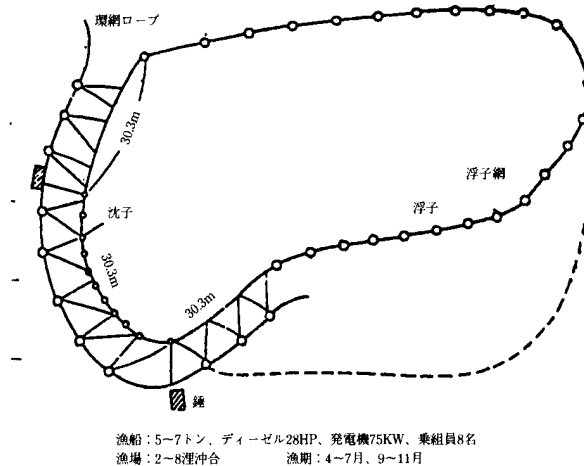
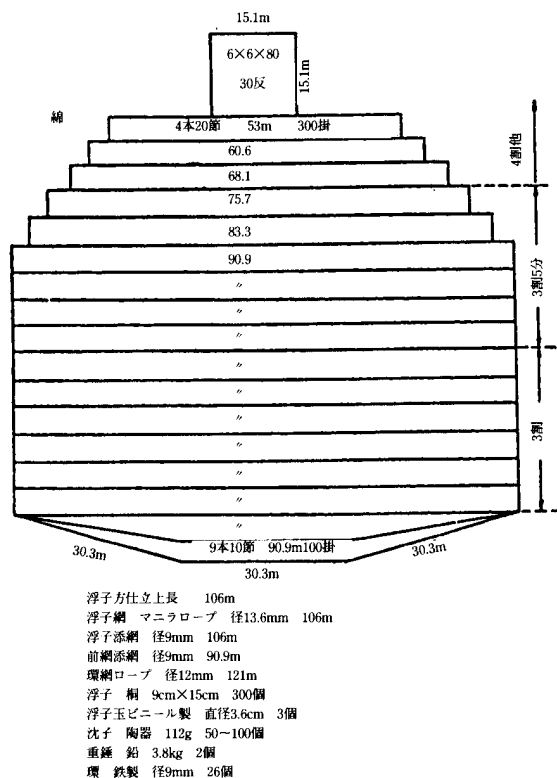


図1-2-(1) いわし棒受網見取図とその配置図(島根県)

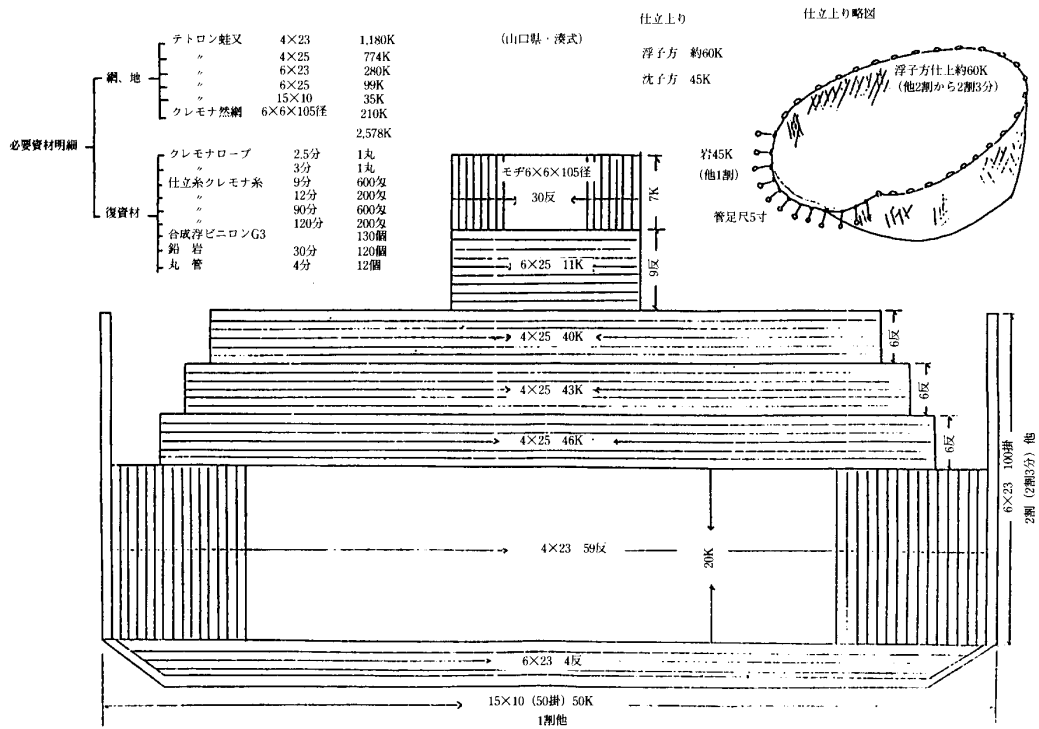


図 1 - 2 - (2) 標準型棒受網 (浮敷網) 設計図

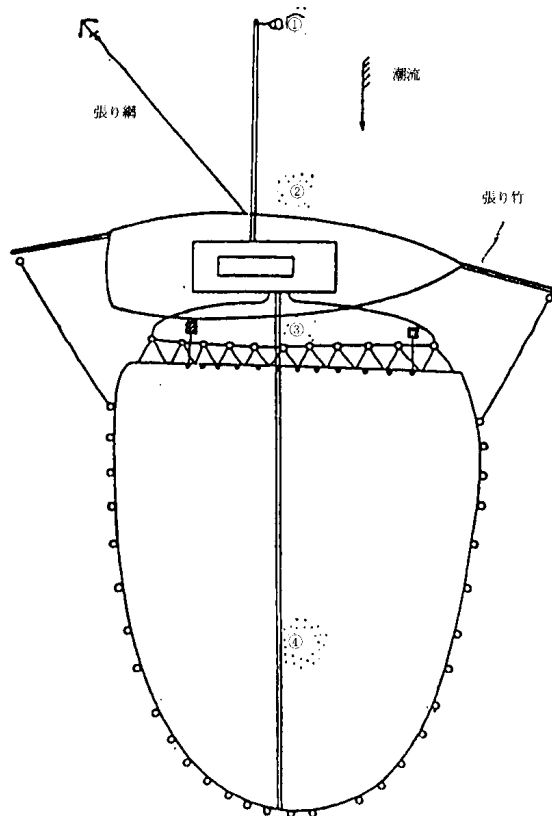
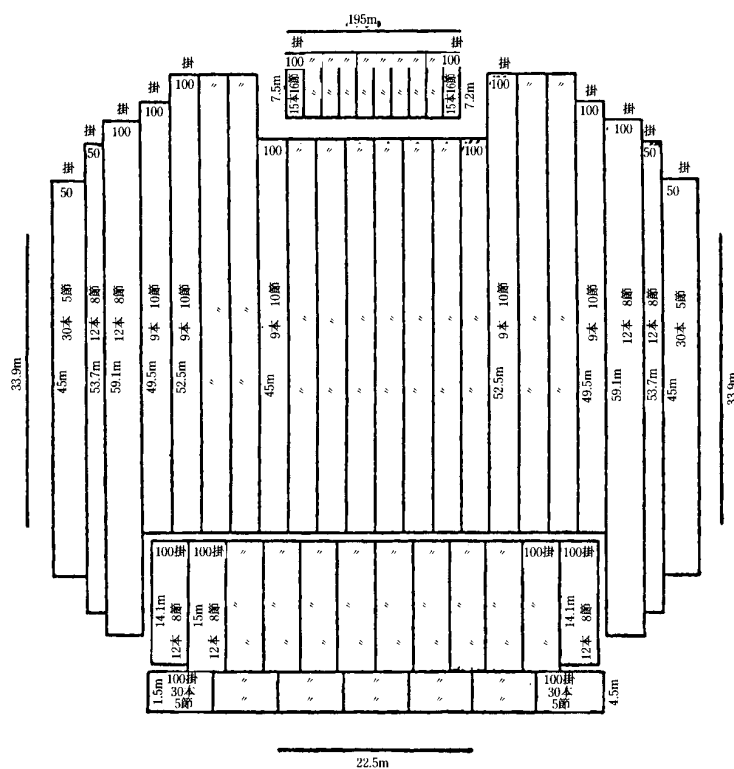


図 1 - 3 作業図



前網ワイヤー 径9mm 33m 6本
 前網元三角 綿糸150本 75m 2本
 縁網脇 綿糸右撚り
 径9mm 33.9m×2
 左〃
 9mm 33.9m×2
 向前縁網綿糸左右然り
 7.5mm 19.5m×2 22.5m×2
 前石 鉛 45kg 6個
 向竹 孟宗竹
 45cm廻り 19.5m 2本
 張出竹 〃 30cm廻り 9m 2本

図1-4 あじ・さば棒受網網地配置図

表1-1 年次別棒受網漁業経営体数

区分	年	昭30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
経営体		3	2	1	1	19	15	91	99	86	63	64	57
宮崎県からの入漁件数											64	60	56

区分	年	昭42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
経営体		42	68	60	37	34	41	37	64	85	86	111	158
宮崎県からの入漁件数		44	41	34	32	41	40						

区分	年	昭54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平元	2
経営体		137	148	154	131	131	131	97	96	98	81	81	83
宮崎県からの入漁件数													

区分	年	平3	4	5	6	7
経営体		74	78	80	69	63
宮崎県からの入漁件数						

(資料；県水産要覧)

漁業生産量

表1-2 年次別漁獲量(属人)

年次	昭30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
漁獲量	421	233	369	623	735	1688	1327	1379	1796	1999	831	4165	3213

年次	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
漁獲量	5871	4838	4700	3418	3414	3171	4053	4160	5510	6609	8784	6873	6408

年次	56	57	58	59	60	61	62	63	平元	2	3	4	5
漁獲量	4307	4389	2018	2902	5096	5074	4504	5425	4983	9211	8526	5074	9530

年次	6	7
漁獲量	8183	6080

(資料：鹿児島県水産要覧・属人)

2. 漁業技術の現況と今後の課題

1) 現況

棒受網漁業は、夜間、単船で船を錨止めし、集魚灯を利用して浮魚(イワシ類、キビナゴ、ソウダガツオ等)を漁獲する敷網漁業である。この漁業が1959(昭34)年に本格的に本県に導入されて以来、漁法そのものには変化はないが、その後の視察等の結果、漁網がクレモナから、より水切りが良く軽いテトロンに改良されたほか、張出棒がFRPに改良され、船の大型化(9.9ト)に伴う漁網規模の拡大が図られ、揚網についてもネットホーラー導入による省力化等の近代化が図られている。

2) 今後の課題

(1) 棒受網漁業の技術(漁具、機器を含む)の一層の改善、近代化が必要である。しかし、昨今の魚価の低落等により、当面、これ以上の改善は望むべくもない。

一方、当該漁業の漁獲物は主として加工向けが多く、その点では背後地に加工場がある地域で一応の安定を続ける可能性がある。

(2) 漁業技術の改善を図るには、漁船の大きさに見合った装備、漁具の改善が必要であり、反対に過剰な装備は転覆等操業上の事故につながる恐れがある。漁場の広さ、資源量との見合い等から行政上漁船のトン数の制約があり、こうした漁業法の制約がある現状では、経費の節減に留意することが肝要である。

3. 参考文献

- 1) 宮崎千博(1960): 沿岸近海漁業, 水産学全集3.
- 2) 鹿児島県水産改良普及職員協議会(1985): 鹿児島県水産業改良普及の歩み(水産業改良普及事業30周年記念)1953~1983年.

(山下 耕平)